

国士館の思い出

銃剣道部の揺籃ようらん

「男児志を立てて郷関を出ず、学若し成る無くんば死すとも還らず」

思い起こしますと昭和五〇年四月、私は郷里である石川県小松の母に、そう自分の決意を告げ、国士館大学へ入学するために上京したのでした。

それまで四年六か月間、自衛官として海上自衛隊に勤務していた私は向学心に燃え、大学受験を志し、勉強は単に知識ではなく、考え方の気付きを啓発するための学問でなければならぬと心に決めたことが大学進学のための動機づけであったと云えます。そんな想いの自分にぴったりの大学が国士館大学でした。

入学試験は、地方試験で受験、昭和五〇年二月一日広島市の予備校「広島英教学館」が試験会場でした。筆記試験の先生は、法学部の椿幸雄教授で面接試験官も椿

先生が担当されました。試験会場では、その後同級生となる山本順一君が山口県から受験に来ていました。彼は入学後鶴川剣道部に所属して授業でも学生生活でもよく交遊する友人となりました。

海上自衛隊を退職するにあたり、呉総監部援護室で意向調査の面接を受けることになりました。係官から自衛隊に入隊してどうかであったかの感想を尋ねられ、「自分ではよくわからないが、親から自衛隊に入ってお前は変わったと喜んでくれた」ことを伝えました。また、退職してから何がしたいかと聞かれ、「社会や人のために役に立つと思える仕事に就いて、終生、国を守ることに寄与して往きたいと思う」と答えたことを覚えています。

さて、合格通知を受け取り、入学手続きを済ませたままではよかったです。自衛隊を退職した私には生活す



政経学部一部政治学科一五期生

戸水 俊輔

るための収入もまた入学後二年目からの学費を得る当ても全くありませんでした。そのような状況の中で生活費だけ持って上京することになったのです。

私の入学する「国士館」は、大正六年、激動の大正中期、創立者柴田徳次郎先生ほか青年有志が、智力と胆力を備えた有為の人材の育成に思いをはせ、東京麻布の地に私塾「国士館」を創立したことをもって始まりとします。そののち、吉田松陰ゆかりの地、江戸時代に、長州藩下屋敷「若林藩邸」のあった現松陰神社畔に学校を設立しました。商業学校、中学校、国士館専門学校を経て、戦後、学制改革にともない、現在の大学へと至っております。

昭和五〇年四月、東京に身寄りのない私は住居として鶴川校舎（現町田キャンパス）望岳寮に入寮しました。私の入寮した五階C棟の舎監は、松本敏道先生でした。寮生の同級生に橋本長善、沼崎朋之、門井保君たちがいました。後に銃剣道部の仲間になりました。寮生活の一端を述べますと、早朝の「総員起床」から始まり、各階で「点呼」「掃除」を行います。また、夜は「掃除」「点呼」その後に「館歌演習」等が行われました。規律ある寮生活は、人間形成に資する思い出に残る体験となりました。

私が標題にある銃剣道という武道を知ったのは、昭和四〇年代初め頃のテレビ番組で大塚製菓提供のご当地ドラマでもあった広島県呉市の対岸にある海軍兵学校を舞台にした青春ドラマ「若い命」です。俳優の南道郎扮する鬼教官が銃剣道防具を身にまとい、私をはじめて目にする木銃で生徒をしごく訓練風景が強烈な印象でした。銃剣道に非常に興味を湧き、機会があれば、是非やってみたいと思うようになったのです。ちょうど海上自衛隊に入隊して昭和四七年夏、ドラマの舞台であった江田島の対岸、呉警備隊の営庭で私の銃剣道訓練が始まりました。

それから四年の歳月を経て政経学部政治学科の学生になった私は、大学に登校して講義を受ける前後に学部事務室におられる学生主事の林勇先生に日参するのが日課となっていました。朝、登校すると先ず学部事務室に顔を出して、「おはようございます」と挨拶してから教室に向かいます。下校する時はその逆で「失礼します」と挨拶して帰ります。その当時は学生主事の先生が各科目の出席を取っていました。国士館大学の学生主事（往時学生監）は、陸上自衛隊の区隊長、海上自衛隊の分隊長のような役割をされておられました。特に地方から入学した学生が多かった当時、学生にとってはまさにお父さ

んであり、またお母さんのような存在であったと云えるのではないでしょうか。私を始め多くの学生たちが学部事務室の学生主事の先生方を訪ねることが多く、アットホームな雰囲気があったように思います。

学業の面では卒業後に中学校の教師になった橋本長善君の勧めもあり、政治学科の教科の他に教職課程も履修することになりました。思い出に残る出来事として、四年間の時間割で日曜以外は月曜日から土曜日まで必ず何科目かを履修して平日に休みの日を作らなかつたことです。海上自衛隊にいた私は「月月火水木金金」を信奉していたのかも知れません。

そして、望岳寮の屋上で毎晩、仲の良い寮生の一年生が十数名集まり、体力錬成トレーニングを行っていました。トレーニングの目的は、規律ある寮生活を快適に過ごすためにお互いを勇気づけ、励まし合うことでした。このことがきっかけとなり、友情が生まれ、主に望岳寮の同級生の仲間たちと共に、他の同級生も加わり一緒に「銃剣道部」創部へと繋がっていくことになりました。初代銃剣道部部长兼監督には、林勇先生に就任して頂きました。

望岳寮での生活は、一年生の夏休みを迎えるところで終了となりました。前期分の寮費は、収めてありました

が、寮生活はあくまで東京に身寄りのない私の学生生活を始める上での足掛かりでした。私には、二年生以降の学費の確保と学生生活を送る上での生活費を工面しなければならぬ課題が残っていたのです。

望岳寮を退寮した私は、その時期に自衛隊から支給された中途退職者の一時金で京王線にある下高井戸駅の近くに下宿を借りました。夏休みの間、新宿中村屋のレストランで皿洗いのアルバイトをして働きましたが、皿洗いのアルバイトでは次年度の学費はおろか、生活するのがやっとの状況でした。

その時でした。入学時に配付された「創立者 柴田徳次郎先生」という小冊子の内容に括目したのです。創立者柴田先生が苦学力行されたように自分も牛乳配達をして学費を稼ごうと思いついたのでした。そして、そのころ創刊されたばかりの「週刊アルバイトニュース」を購入して仕事口を探すうちに、自分が住んでいる下高井戸の町に牛乳配達ではなく、産経新聞の配達員募集の項目があることを発見しました。すぐに販売店を訪ねると運よく採用となりました。それから、卒業までの足掛け四年間を産経新聞配達奨学生として働くこととなったのです。

毎朝、四時一五分に起床、新聞配達を済ませて登校、



昭和 53 年 11 月 4 日 創立記念日、大講堂前にて (筆者)

下校して夕刊配達、月末は集金。その間、銃剣道部の仲間と稽古。なかなか両立の難しい、しかしながらそれだけで大変楽しい充実した学生生活の日々であったと云えます。

新聞配達のエピソードとして、その当時より少し前の時代に歌手の山田太郎が唄う「新聞少年」と云うヒット曲があり、歌詞の中で「雨や嵐にゃ慣れたけど、やっぱり夜明けは眠たいな…」というくだりがありました。しかし、実際に新聞配達をやってみると一番辛いのは、

雨や嵐であることがよく分かりました。二月に大雪が降った時などは、自転車を引き連れて配達したことを憶えています。また、台風が接近している夕刊の配達途中で、被害予防に玄関前の立木の太い枝を伐採している主婦の方に替わって鋸で枝を切ったこともありました。

一番嬉しかったことは、読者のお一人でいらっしやった東京家政大学教授の見藤妙子先生から、クリスマスプレゼントとして先生が編まれた毛糸のベストを頂戴したことです。現在もベストは健在で大事にタンスに仕舞い、親子二代で着ることになりそうです。

さて稽古事は、何かきつかけがあつて始めるわけですが、やがてそれ自体に大きな目的があることが後になってわかる様になりました。同好の者たちが好きで始めたクラブ活動でしたが、稽古をおこなう課程で修行には究極の道が存在することを知り得たのです。

そして、銃剣道の稽古を通じ、武道修行における人としての品格の向上を考えた時、自己の修行目的を自覚し、錬磨を通じて心身の向上・充実を図り、責任ある行動を心掛けた時に、それは決して自然発生的に生まれるものではないという結論に達しました。常に身近の良き規範（良き先輩や見たり、読んだりした物）を模倣して第二の天性と成す努力をするものでなければならぬと

感ずるに至りました。

また、昔の武士は、生活は貧しくとも常に模範的な生き方を心掛ける努力を怠らなかつたという清貧の美德があったことを知りました。振り返れば、かつて教えを戴いた昭和三〇年代の小学校・中学校の先生方は質素な背広を着て、袖の辺りがすり切れたワイシャツであったのを思い起こします。そして、怖い存在であり、しかしながら実に熱心に私達を教育して下さった姿を忘れることが出来ません。昔、人間的に成長を遂げた人は、むしろ華美な身なりや高価な物に拘こだわらない様になるものでありと教えられたことを思い出し、やっとその真意が掴めたような気持がしております。「凡およそ人と為る要は、修徳達人なり」。今、その言葉の意味を沸々と嘯なげみしめる者です。

そんな甲斐もあつて昭和五四年三月二〇日晴れて卒業式の日を迎えることが出来ました。卒業式が終わり、吹奏楽部が奏でる「蛍の光」のメロディーが流れる中、会場の自席でいつまでも立ち上がらずに、手拭で顔を押さえる自分自身の姿がそこにありました。

大学卒業後、学校法人国士館に奉職することになりました。銃剣道を錬磨することで道を知り、自身の行動が国家と関わりあることを悟り、大学職員としての仕事や



平成 28 年 1 月 13 日 銃剣道部寒稽古 (左側筆者)

クラブ活動を通して、青少年への指導の責任性を強く感ずる様になったと言えます。

その後、私は銃剣道部監督となりました。忘れられない出来事として銃剣道部創設から八年目の昭和五九年六月でした。全国並北陸銃剣道大会（現全国銃剣道能美大会）で一度も勝てなかった防衛大学校と新進気鋭の山梨学院大学を破り、初優勝したことです。

また、平成二六年四月に第五八回全日本銃剣道優勝大会で一五年振りに一般第二部で団体優勝を果たした銃剣道部は、五月三〇日にNHK海外向け番組「スポーツ・ジャパン」の銃剣道を紹介する取材を受けることとなりました。その折に「日本古来の槍術の粋を集大成して編み出された銃剣道の技が、『突き』のみに特化した理由」を質問されたのです。

剣道の有効打突部位は「線」になっていると説明できませんが、銃剣道の場合は「点」であることが特長です。したがって技を決める上で間合い（相手との距離）が最も重要になります。銃剣道は、斬る・薙ぐ・打つなどの不確実な打突を排して「突き」のみの技に特化しました。

そんな中で私事ではありますが、平成二〇年に、長男が国士館の政経学部経営学科を卒業しました。長女は、



第 34 回全日本学生銃剣道選手権大会（後列左より 3 人目筆者）

平成一八年に本学二一世紀アジア学部を巣立っておりま
す。子供たちもまた、銃剣道部に入学して、学生時代を
過ごしました。親子三人で同じ大学の同窓になったと思
うと感慨無量の気持でいっぱいです。

そして、銃剣道部は、創部からの過程の中で学生連盟
結成に参加、その後、学生連盟は関東地区学生連盟から
全日本学生連盟へと次第に発展を遂げていくことになり
ます。

平成二六年全日本学生銃剣道連盟会長に就任、青少年
の健全育成と銃剣道の学校体育武道必修化を祈念して止
みません。

「孔子は賢者からは大きな道を学び、不賢者からは小
さな道を学んだ。洒掃應對といったような小さな日常生
活の心得も、治国平天下といったような政治的大理想
も、事柄に大小の別があるとしても、共に学ばなければ
ならない。堅い人からも、必ずしも堅くない人からも、
多くを学びとらなければならぬ。大道を説くだけが先
生であるのではなく、小道を教える人もまた先生なので
ある」(子張)

翻ひるがつて、現代社会に生きる私共は、多くの人を師と
して精進に努めねばと感じ入っております。最後にこれ
からの己の人生の指標としております言葉を記し、筆を

置きます。

「忠勤を抽ひきんで殊ことに丹誠を致す(真心を込めて物事を
すること)」(源平盛衰記)

「一切は、現象に如しかず」